商学部長 石原裕也 教授

私の恥歴書
－会計学そして「計理の専修」との出会い－

いしはら　ひろや
1961年香川県生まれ。1986年早稲田大学法学部卒業。2001年一橋大学大学院商学研究科博士後期課程修了、博士（商学）。主著として、『企業会計原則の論理』（白桃書房，2008年）、『会計における責任概念の歴史－受託責任ないし会計責任－』（共著，中央経済社，2018年）

昨年９月１日に本学商学部長を拝命いたしました石原裕也と申します。この度、育友会本部から、会報『育友』で自己紹介をというご依頼をいただいたのですが、正直申し上げて大変困ってしまいました。と申しますのも、私自身、これといった趣味もなく、また取り立てて秀でた能力もありません。強いてあげるならば、人よりも背が低いということくらいしか特徴がございませんので、紹介して感心されるようなことも、ましてや感動されるようなところは全くない人間でございます。

思案したあげく、ふと思いついたのが、昨年６月で私もちょうど還暦（1961年生まれですので満年齢です）という人生の節目を迎えたこともあり、ここでひとつ自分のこれまでの人生を振り返ってみてはどうかということでした。それに際しては、専門とする会計学との出会いと共に、「計理の専修」の由来と意義も併せてご紹介できたらと考えております。ということで、この場をお借りしまして私の「履歴」ならぬ「恥歴」を開陳させていただきたいと思います。

少年時代から会計学との出会いまで

私は四国の香川県、と申しましても車で15分か20分走ると愛媛県という、県内最西部に位置する観音寺市（いまでは平成の市町村合併により県境まで観音寺市になっています）に生まれ、その街で高校卒業までとプラス１年（大学受験浪人）を過ごしました。小学校５年生の頃から剣道に熱を上げ、高校時代までそれは続き、大学進学の際にも剣道で大学に･･･ということも頭をよぎりましたが、そこまでの能力もないかと諦め、普通に大学受験をすることといたしました。ここまでは割と普通の少年だったと思いますが、ただ１点（他にもたくさんあるだろうと突っ込まれそうですが）、私の性分には大きな問題があり、興味があることには没頭する反面、興味がないことは見向きもしないというところがあります。つまりは「がまん」というものが苦手で、このような性格が災いしたのか、大学も現役合格は果たせず、１年間浪人（これまたがまんのない浪人生ではありましたが･･･）した後、なんとか東京の大学に進学でき故郷を離れることとなりました。

実家を離れ、親の監視の目（親自身に監視している意識はなかったと思いますが）から解放された大学時代は、私にとっていま振り返っても最も楽しい時代であり、同時に私の人生が蛇行運転をはじめた時代でもありました。あまりの楽しさからか、ついつい長居をしてしまい、５年間大学にお世話になってしまいました。また、私の進学先は法学部で、したがって当時の私は、会計学について、簿記や会計といわれても聞いたことくらいはある程度の知識でした。

大学を卒業するに際して、これといった目標もなかったのですが、あえて理由をあげるとすれば望郷の念に駆られて、地元香川の地方銀行に就職し、その後、２度の転職を経て32歳で無職となりました。理由は、

公認会計士試験に挑戦するためです。この頃になってようやく会計というものが私の人生に関わってきました。ただ、公認会計士というのは会計専門職といいながら、会計の知識だけではその試験に合格することができません。ここでもまた、私のわがままな性分が災いいたしました。簿記や財務諸表論といった会計関連科目、昔取った杵柄で法律科目ではそれなりの成績をあげられるものの、あまり興味が湧かなかった経済学や経営学といった科目は、何年経っても成績に進歩が見られませんでした。まあ、授業はもとより教科書すらほとんど開かないのですから当然なのですが…。

その後、これでは埒が明かないと感じ、いっそのこと興味のある会計学の研究に専念してみようと大学院進学を決めたときには34歳になっていました。その後5年間、大学院生つまり学生に逆戻りして、運良く年増の新卒研究者になれたときには、すでにちょうど40歳になる年、21世紀最初の年でした。

「計理の専修」との出会い

研究者となって13年後の2013年の秋頃、専修大学から移籍のお誘いをいただきました。われわれ会計学研究の徒にとって、専修大学といえば「計理の専修」として名高く、大変光栄に感じたことを記憶しております。もちろんお断りする理由などあろうはずもなく、謹んでお受けいたしました。

ところで、今日「けいり」といえば、一般に「経理」と表記されます。しかし、専修大学の「けいり」は、あくまで「計理」でなければならないことを皆さんはご存じでしょうか？実はこれには、わが国の会計学における重要な歴史が関係しています。明治時代になって、欧米の簿記や会計がわが国にも導入されはじめましたが、明治末から大正時代にかけて「Accounting」という用語をどう訳すかで一大論争が発生しました。この用語は、今日では「会計」あるいは「会計学」と訳すのが通例となっています。当時も、すでにこれを同じように訳す例が多かったようですが、これに敢然と異を唱えたのが、当時、東京高等商業学校（一橋大学の前身）教授であり、専修大学で講師も務めていた鹿野清次郎です。鹿野はAccountingとは「計の理（計算理論）」を論じる学問であるとして、単に金銭出納を意味する「会計」という用語は不適切で、あくまで「計理」であると強く主張しました。このため、会計研究者の最大の学会である日本会計学会の設立にも参加せず、別に計理学研究会を創設し、その本部を専修大学に置きました。このため、東京高等商業学校（その後の東京商科大学）および専修大学では、太平洋戦争前頃まで授業の講座名としても「会計学」ではなく「計理学」が使用されていました。また国家資格としても「計理士（税理士・公認会計士の前身）法」が制定され、これに際しても専修大学に鹿野を中心として「計理士法案期成同盟」が結成され、法案制定の後押しをしました。鹿野は、その後1年弱の間ですが、専修大学教授も務めています。このように、専修大学そしてわが国の会計研究にとっても「計理」という用語には重要な意義があり、われわれ後進の者も大切にしていかなければならない伝統であるといえます。鹿野の詳しい足跡については、ご退官された安藤英義先生が『専修商学論集』第97号（2013年7月）で紹介されておりますので、ご興味のある方は、大学図書館もしくは私までお問い合わせください。

おわりに －寄り道人生の終着は？－

私は、時々、人生ずいぶん寄り道をしましたね、と言われることがあります。そうした言葉をかけられる度に、正直言って本人は実感がありません、と感じてしまいます。私自身といたしましては、生きたいように生きてきただけであり、60のこの歳になっても自分の人生のゴールがどこにあるのかよくわからない以上、寄り道もなにもあったものではないというのが本音です。

他方で、私のせいで、両親、そして家内およびその両親など周りの人間を、やきもきさせ、また心配と不安、苦労を強いてきたであろうことも想像できます。何といっても家内などは、無職の私と結婚し、長女もその間に授かりましたので、ずいぶんと不安だったであろうと思います。おかげで、私がいまだに全く頭が上がらないのは自業自得と諦めています。

こんないい加減な私が、ここまで何とか生きてこられたのも、このような家族・一族に恵まれたことと、併せて、これまで通ってきた道中で知り合った方々にも恵まれたからでしょう。少年時代、大学時代、そして社会人時代、すべての時代にできた恩師、友人には、たまにお目にかかって昔と変わらぬ関係を感じさせていただくだけで、また頑張ろうという気持ちを与えていただきました。ちなみに、そのような方々のお一人に育友会愛媛支部長を務めていただきました鈴木暁美氏（令和2年度）がいらっしゃいます。同氏は、3度目の職場での先輩社員にあたります。これもまた、専修大学が取り持つ不思議な縁かなとも感じます。

最後になりましたが、育友会会員の皆様そしてご子息、ご息女におかれましては、コロナ禍の中ではございますが、ご健康を祈念申し上げますと共に、今後共、専修大学をご支援の程、よろしくお願い申し上げます。